

□□□□□□

みんなのスペース

◆あて先・問い合わせ
〒028-1392 (住所不要)
山田町役場総務課情報係
(☎82-3111内線417)へ。

ふる里への なつかしさに

毎月届く広報やまだを楽しみに開きます。誰か知っている方が載っていないかしらと思っからです。

そんな時、ただ一人大浦の山崎さん。もう幾つになられただろうか、お顔は思い出せませんが、学校から帰って母が留守の時、子どもの勤で、秋田屋さんの裏通りから山崎さん宅の横を通り、川半の所へ抜け母のいる家へと行きました。

ふる里を離れて五十年。ふる里がだんだん遠くなりそうで寂しいとき、広報やまだの山崎さんの名前に遠

い昔がとても懐かしく思い出されます。母を追い求め一心に歩いたあの道が今どうなっているかは分かりませんが、広報やまだが遠く離れている人たちの心の支えである事に感謝すると同時に、山崎さんが投稿してくる広報やまだを楽しみにしたいと思います。

荒井 美由紀
(大浦出身・東京都町田市・71)

保育園のみずき団子 づくりに参加して

平成25年1月10日。大浦保育園のみずき団子作りに手伝って下さいと言われて、三人でお手伝いに行く事にしました。保育園では、お母さん方も集まっていました。昔ながらの団子の形もあり、子どもたちもホタテやカレイといろいろな形で作って色とりどりの団子が出来上がりました。

その後、子どもたちと懐かしい遊びをしました。あや取りや羽根つき、お手玉のほか、小正月の話をして、作ったお団子も

今半分だもん

阿部 千禰子(大浦・77)

ありがたくも正月を前にして暦を届けていただいた。その暦を何となく見ていたが、暦を見る度、幼少時における母親とのやり取りを今に微笑ましくも懐かしく思い出す。

当時の我が家の貧しさは半端なものではなく、四苦八苦の中でも健やかでつましく生きてる中で届けて下さる暦のほとんどが日めくりであった。



俺が小学生ぐらいの時、数を数える事を覚え、数えるのが面白く、頂いた暦を広げて何枚あるんだべと、一枚、二枚と数えていた。いつの間にか、母が自分の側に座しておられて俺の仕草を見ておられて「何やってんの？」と静かに問いかけて来られた。俺「暦が何枚あるもんか分かんねえから、今数えてんの」と話したら、偉いもんだと言いながら「この暦、全部数える事ができるの？」…ときた。

出会ってありがとう

山崎 卓三(大浦・?)

「今ちようど半分だもん」…それから母が暦について、よく分かるように詳しく教えてくださった。数えなくとも、一年は365と決まっております、そして暦は何でも良く分かるように書いてあり、そしてうるう年についても分かるように教えてくださった母さんだった。

大津波から暗中模索の毎日でしたが、2年のうちには、悲しみ、つらい日ばかりではなかった。忘れられない7月14日、朝から炎天下の中、他県の会社から派遣された11名のボランティアさんたちが住居跡の清掃作業に汗を拭きながら手伝っていた。働きありがたかったです。その誠意を無にしないように、また五十数年思い出のつまった我が家の跡、遊び心で朝な夕なに草とりに歩いた。

昨年の7月14日には、ボランティアの皆さんが織笠入りして、真っ先に住居作業の現場に立ち寄り、ジャガイモやカボチャが植えてあるのを私たちに喜んで話しておりました。

談話室を借り、めいたちに手伝ってもらい、手作りの昼食会

カンカラ三線

菊地 サカエ(織笠・78)

朝四時頃目覚め、ラジオのスイッチを入れられました。沖繩の病院に勤務されている横田医師が山田南小学校と「カンカラ三線」を通しての交流のトーク番組でした。

震災後、医師として大船渡に支援に来たとき、山田町の「佐々木様」と出会い、カンカラ三線の話をし、ビデオ数本をお渡ししたとのこと。その中で、山田南小学校の佐賀校長先生が、ぜひ児童に、と申し出。震災で授業のカリキュラムの大変な中、受け入れてくださった先生方に感謝を述べておられました。また、読谷村の三線店の店主さんや沖繩の方々への厚い支援で実現できたとも話しておられました。

南小の虎舞や「男の料理教室」で沖繩の料理を食べたことなど、山田の強い印象をラジオを通して話す横田医師の言葉に、全国から頂いた物心ともの支援にあ

フレッシュ
ウーマン

佐藤美保子さん(荒川・29)

楽しむことを大切にしたい

「一人の力は限られていますが、少しでも町民の皆さんの力になりたいのでこれから長く寄り添っていきたいです」と仕事への思いを話すのは、山田町社会福祉協議会(以下、社協)に勤務する佐藤美保子さん。

佐藤さんはカフェ「よりあいつこ」という事業で、仮設住宅などで参加者と一緒に歌や体操を行い、交流の場を提供しています。ま

た、お買い物バス「まぢづけえ号」で利用者の生活に寄り添った業務も行っていきます。

仕事でうれしかったことは「参加する方が私の手が冷たいからとぎゅつと握って温めてくれたことがあります。自然にあふれ出る優しさに心までも温かくなりました」と笑顔で答えます。自身の性格をマイペースと話す佐藤さんですが、昨年盛岡市で開催された東北六魂祭にも青森ねぶた祭りのハネトとして参加するなど行動的な一面も「楽しそうなことがあれば自ら飛び込んでいきます。震災で大

変なときだからこそ、楽しむということを大切にしたい」と話します。

「社協でも楽しめる事業をどんどん開催していきま。町を元気にするのは人の笑顔だと思つので、ぜひ参加してください」と、職場のPRも忘れません。

らためて感謝の思いでいっぱいでした。

中垣のり子(船越・?)

三正月

昭和中期まで、色々な年中行事は旧暦で時期が合っていた。

三正月とは、おじいさん、おばあさんが子どもや孫たちについて聞かせていたことわざを思い出せば“松コで待った大正月、笹で少つとの小正月”そして最後の正月が“杉コで過ぎたで”俗に三正月と言う。松・竹・杉と年中、青々と栄るものを門々に飾りつけ、福を呼び、悪をはらうという風習だと思う。

大正月は、元日、3日、5日と一日置きにいろんな餅を食べ、7日には鏡開きと言って門松を納め七草粥を食べ、やがて来る春からの農作業、漁業に備えて体力をつける意味であつたらう。

西館 隆(船越・79)
《次号へ続く》

やまだ文芸広場

川風に もうすぐ春だと ねこ柳

佐藤 兼男(荒川・86)

風化せず二年過ぎしの大震災

子らに伝えよ 在りたるままを

暖かな春の息吹に誘われて

春告鳥のウグイス 花に鳴く

内館 洋一(飯岡・69)

年老て 冬のさむさが 身にしみる

庭の木に いさをもとめて すぐめくる

ねこやなぎ 春がきたよと ほころびる

上野 ヤス子(大浦・?)

震災で 今だ帰らぬ 稚児を待つ

寒空に 星となりにし 消えた人

阿部 千禰子(大浦・77)

被災地の 雪よふんわり 軽く降れ

三月の あの日あの時は 忘れたい

思い出は いいことだけを 話し合う

芳賀 誠一(豊間根・72)

春の桜

春の桜 サックサク

山田の幸せの春の桜 サックサク

佐藤 啓子(山田・?)

イラストコーナー



佐々木 茉祐(12)